

現代アフリカの危機

米山俊直



一、はじめに——アフリカの遺産

日本アフリカ学会は本年（一九九一年）に第二十九回の研究大会を大阪・千里の国立民族学博物館でおこなった。アフリカ大陸という広大な地域を対象にした地域研究学会が発足してすでに二十九年を数えることになる。ちょうどアフリカの年と言われた一九六〇年を経た時点で誕生したこの学際的な学会は、会員数も五百人を超え、本年はじめて会場を二つにしなければならぬほど報告が多くなり、日本のアフリカ研究も発展したことを示

している。しかし、これまでの私たちの研究はともすれば一般的な科学的課題に対して、アフリカにその事例をもとめて研究するという、きわめてアカデミックな関心に限られていて、現地のかかえている問題やそれに対する対策などに配慮する余裕があまりなかった、と言えるだろう。多くの研究が霊長類学や淡水生態学、あるいは地球科学のような自然科学の研究に比重がかかり、それに比べると社会科学、人文科学の分野についてはまだ限られた成果しか見られていなかったのが現状である、といつて言いすぎではないだろう。もちろん多くの研究者

の関心が純粹に科学的客観的な課題にとどまらず、そこに生活するアフリカの人々の生活、社会、文化にも及び

ジを継承して人類の将来に役立てることが、私たちアフリカ研究者の使命であると思っている。

はじめて、その分野でも優れた成果があがりつつある、ということもあるが、研究対象は巨大であり、その全貌を把握することは容易ではない。文化系では民族学ないし文化人類学のような分野が中心であるが、政治学や経済学の研究者もすこしずつ増えてきているし、自然系の研究分野においてもしだいに薬学、医学、農学などの分野からの研究も進行していて、やはり三十年の活動成果は大きかったといえそうである。しかし、かつて農学者のなかで「農学榮えて農業亡ぶ」と言われたことがあるが、その口真似をして言えば「アフリカ榮えてアフリカ亡ぶ」ということにならないように、注意しなければならないだろう。

アフリカは文化的にはじつに豊かな遺産を人類に遺してきている。ことにその精神的な側面においては、かつてドイツのヤン・ハインツ・ヤーンが指摘したように、じつに大きい遺産を遺しているのだといつてよい。それを正當に評価することが出来、その遺産の与えるメッセー

しかし現在のアフリカ地域は、なお深刻な危機の状態にある、といえよう。その点を無視して、アフリカについて発言しても、何の役にも立たないのではないかと思われる。その状態は一種ころがり落ちてゆく石のようなもので、ころがり出したら止まらないままに、加速度がついてどんどん落ちていく、という状況ではないかと思われるのである。しかも、この状況はまだ暫くつづくのではないかという感じがするのである。そうでなければよいが、残念ながらどうもそうはいかないのではないかとと思われる。私はアフリカが好きで、その風物や人間にはたまらない魅力を感じているのであるが、現実を客観的に見ていると、ただ自然の雄大さ美しさをうたいあげ、人情の麗しさを賛美しているだけで終わることは出来ないような状況にある、といわなければならぬのである。この転落しつつある石の状況を直視して、とにかく落ちるところまで落ちて、その落ちたどん底のところから、なにかの問題解決の端緒が開けるのではないか、という

気がしているのである。結論を先に述べてしまうことになったが、以下このような見方の根拠を述べてみたい。

二、ハッザとウッドバーン教授のこと

アフリカ大陸には、三百万年という人類の歴史の全部の痕跡が遺っている。現実には、現在でも非常に昔からの生活様式をそのまま遺しているところがある。たとえば、狩猟採集民。カラハリ砂漠のサン（ブッシュマン）と呼ばれている人たち、あるいはザイルのイトウリの森のバトウワを代表とする、ピグミーと呼ばれる人々、その仲間はコンゴなどにも存在が認められている。また、今日では減少しているけれども、ウシ、ラクダを飼育して生活している牧畜民（小家畜の牧畜もあるが、主要なものはウシ牧畜民とラクダ牧畜民といってよい）。さらにまたアフリカの農耕民の中心的存在になっている焼畑農耕民。焼畑、すなわち森を伐採して火をつけて焼きはらい、そこを畑にして種をまき、植物を育てて、地味が痩せてくると他に移動していくので、移動耕作（シフティング・カルチベーション）とも呼ばれている、そのような農業を

やっている焼畑農耕民たち、などが現在も存在しているのである。狩猟採集民、牧畜民、あるいは焼畑農耕民、そういう人々が、現存していてそれぞれの生活様式を確立している。そして、それぞれが、非常に興味深い、貴重な豊かな文化を創り出し、人類文化の一部にしている、ということとは否定できない事実である。

ついこの間まで、ヨーロッパ中心の考え方によるならば、これらの生活様式は非常に野蛮あるいは未開なものであって、人類は過去にそのような時代を経験したものの、それを脱皮して進化し、現在の文明に到達したのである、という見方が主流を占めていた。したがってアフリカに現存するこれらの生活様式を具えた民族は、その野蛮性、未開性を脱皮できないままで「残存」してきた民族であるという認識が強かった。

しかし、最近ではそのような仮説には否定的な主張が多くなっている。

最近のこと、ジェームズ・ウッドバーン教授（LSE—ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）が来日してその調査したタンザニア北部の狩猟採集民ハッザの研究成

果について、京都その他の各地で発表していった。ムブル地域のサバンナに居住しているハッザは、周囲の牧畜民や農耕民の生活様式は知りながら、牧畜民化も農耕民化もしていない。そして、周囲の攻撃的な性格を具えた牧畜民からも攻撃されないうで、バンツー系の農耕民とも共存して生存を続けてきている。人口もわずかな千人数といわれ、それで文化が維持されていくのだろうか、と思われるほどの規模である。さらにタンザニア共和国が独立して以来、政府はこの人々の定住化を計画したが、容易に実現していない。新知事が着任するとその政策を実施しようとするが、強制的に家を建て畑を与えても、しばらくすると自然のなかの狩猟と採集の生活に戻ってしまうのである。彼等にとつては、そのような干渉や拘束はありがたくなく、男たちは自然のなかで野性動物を追ひ、蜂蜜を採集し、女たちは野性のイモ類や果物、木の実などを採集して生活することが一番幸いなのである。ウッドバーン教授によれば、食糧採集のための「生産労働」は一日二時間であるという。二時間働けば、十分に食糧が出来る、採集する対象は周辺に豊富にあ

るという社会である。狩猟の対象も小動物からカモシカ類で、男の労働の方が効率が悪く、獲物がつねに獲られるのではないが、女たちの採集によつて基礎的な食糧は十分支えられている。獲物の分配は徹底的に平等の原理があつて、狩猟が上手な弓の名人でもとくに威張ることはない。そして所有している物質文化はきわめて簡素で、住居もたちまち造れる小屋であり、そのために周辺の攻撃的な牧畜民からの掠奪もない。サバンナの自然の豊かさ、この無一物にちかひ生活がこのような狩猟採集社会を存続させてきたのである。彼らは独特の娯楽として一種のギャンブルを伝統文化に具えていて、それが人々の余暇時間を支えている、とウッドバーン教授は言う。もつとも、タンザニア政府はなんとかしてこの「国辱的な伝統文化を消し去りたいらしく、最近では初等教育を全寮制の学校を創つてやりはじめている。ウッドバーン教授は、それが最も大切な狩猟採集の技術を親から子供へ伝達する機会を奪つてしまい、それに代る技術を教えないようになっていくという点で、ハッザの真の危機が到来していることを指摘している。

すこし前までの進化主義的人類学では、狩猟採集社会は人類の最古の生活—生産様式を伝えるものであるとされる。そしてそれは、砂漠や極地の氷雪地帯など農耕化に適さず、農耕、牧畜の段階に進めなかった地域に残存して、そのような環境に過適応（オーバー・アダプテーション）をした民族集団の社会が伝えてきた生産—生活様式である、と言われてきた。さきにも触れた、赤道直下の熱帯森林のビグミー、カラハリ砂漠のサン（ブッシュマン）などが、その例として挙げられてきた。地球上の温帯など農業、牧畜に置換された地域の場合は、たしかに狩猟採集生活から農耕牧畜生活への転換があり、その上に現代的な工業生産が築かれてきたことは事実である。しかし、現在残存しているハッザのような社会は、その存続に独自の歴史的理由が存在していたことが理解できるのである。

そしてそのような長い歴史を持つている自然に埋没した生活様式が、いわゆる近代化の過程において、その文化伝統、生存技術の伝承の断絶という、真の危機に直面しているのである。

ヤルタ・ボツダム体制と呼ばれる国際環境が生まれ、米ソ両大国の緊張を前提にした東西関係が、自由主義諸国対社会主義諸国という二つのブロックに世界を分け、いわゆる南の開発途上諸国は、その両体制の狭間で行動選択を迫られてきた。しかしこの世界はきわめて最近になって、いわゆるマルタ会談に象徴されるような一連の動きによって、東の体制の大きい変革が事実となり、ソ連をはじめとする東欧諸国の変化、ドイツの統一、そしてさらに湾岸戦争という事態を経験して、時代はさらに一歩進むことになったのだといえる。

こうした世界の状況下でアフリカ諸国がどのような選択をしてゆくか、それは大いに興味のあるところだが、さて現状はどうか。はじめに言った危機的状况とは何を指しているか、その点をあきらかにしておこう。

アフリカの危機についての指摘は、竜谷大学の川端正久教授の『アフリカ危機の構造』（一九八七年、世界思想社）が非常によく整理されている。他にも西川潤『飢えの構造』などがあるが、ここでは川端正久教授にしたがってアフリカの危機の一般的性格を概観しておくことにしよう。

三、川端正久『アフリカ危機の構造』のこ

このように地球上の人々の動き、歴史の流れによって、伝統的な社会が大きく変貌をうながされてきたことは、世界中のあらゆる地域、あらゆる民族に共通したことである。それはハッザのような民族集団を消滅させてしまいかねないような力をもって変化をうながしてきたのである。世界の歴史をみていると、そのなかで運の良かった民族と不幸であった民族が存在していることが理解される。一般的に言って、アフリカ大陸という地域とそこに住んでいる諸民族は、これまでの世界史のなかでは、不運な立場に置かれてきたといえるだろう。一口にいえば、一七一—一八世紀の奴隷貿易と、一九—二〇世紀の植民地時代という四百年にわたる時代の間、ヨーロッパ人たちがアフリカ大陸を踏みにじつてきたという現象を否定することは出来ないのである。

両世界大戦を経過して、植民地体制は一転して独立国のあいつぐ誕生となる。世界には北の戦勝国を中心に、

う。川端教授は「飢餓ブーム」で注目を集めたアフリカ大陸は、構造的に危機を内包しているとして、それをつぎの六つに整理する。

① 自然的要因（繰り返えされる旱魃、広がる砂漠化、消える森林、少ない灌漑、多様な自然災害）。

② 社会的要因（人口増加、拡大する食糧ギャップ、加速する都市化、脆弱な輸送、社会的不公正）。

③ 経済的要因（停滞する経済、後退する農業、岐路の伝統的農業、問題を抱える漁業と牧畜、低下する食糧生産、恒常化する食糧輸入、偏重される換金作物、介在するアグリビジネス）。

④ 世界経済的要因（下落する輸出商品価格、膨れる対外債務、伸びないODA、保護主義）。

⑤ 政治的要因（飢餓問題の軽視、失敗した農政、「社会主義」政策と飢餓、病める援助）。

⑥ 軍事的要因（嵩む軍事費、多発するクーデター、国際化する紛争、増える難民）。

そしてこの構造的な要因をつぎに詳細に論述している。

まず第一番は「崩れる生態系」。これは天災という要素もある。防ぎようもない状況もありうるが、大陸だから規模が大きく、非常に大きい旱魃の年が続いたり、それも何年にもわたる場合もある。典型的に見られるのは旱魃で、雨が適当な時に降るか降らないかによって種播きができたり、できなかったりする。その結果その年は収穫皆無ということもある。それがかなり広範な地域で起こるのである。

それと関連するが、ある程度乾燥してしまったところへ、家畜——サヘルの場合は山羊などが多いのだが——が草を食べつくしてしまう。家畜の数も増えすぎて、乾燥地が草の再生産能力を失ってしまい、たちまち裸地になり、砂漠化が起きてしまう。これがサハラ砂漠南縁のサヘル地域に起きている現象である。それもセネガル、マリ、ニジェールなど広範な地域で起きていることが大変問題になるわけである。

また森林のほうも、いわゆる焼畑移動耕作が問題を生んでいる。焼畑はある森を焼いて、数年耕作して、地味が悪くなると数年後に他の所に移るのである。放棄さ

地域であることも問題である。

つぎに人口増加が問題になる。改めていうまでもなく、年三％という人口増加率には、その食糧生産能力が追いつかない。すでに食糧輸入依存の体質が出来ているアフリカ諸国にとって、これは別の危機の原因になっている。

もう一つ大きい問題は、昔からの村落組織のような伝統が崩れて、いわゆる部族の良き伝統が崩壊して、価値観の混乱による葛藤を生むだけではなく、都に向かつて村を離れるという、いわゆる向都離村現象がアフリカの全土に認められることがある。町へ行けばなにか良いことがある、ということ、村を出てしまうのである。これが地方の村落の共同体的な慣習を消滅させてしまうばかりでなく、他方において都市施設の整備されていない都市の側に人口集中が起きる。都市には水道も電気もない町が延々と広がっていくことになる。ケニアのナイロビ、ザイールのキンシャサなどには、古くからの町の外延にそのような未整備の都市がどんどん膨れあがっている。極端な場合は家屋もなく、ボール紙で屋根をついている例もある。それでも人口の集中は進行していて、

れた畑は自然に再生して、三十年も経つと二次林が再生する。かりに五つの土地があつて、七年ずつ使うとすれば、三十五年で元に戻るというローテーション・サイクルが可能だから、自然は大きく破壊されずにすむ。システムとしては理想的であるが、現実には、七年のサイクルは無理で、三年ぐらいで土地は使えなくなってしまう。三年で動いてしまうと五箇所の土地があつても十五年で戻ってきてしまうことになり、森の再生は不十分である。痩せた土地に播種するということになり、悪循環を起こしてしまうのである。この悪循環の理由には、人口圧力がある。子供が増えて食糧を要求するために、耕地を速く回転させても耕作をうながす必要が生じてくる。もうひとつは現金経済の導入。例えばキャッサバに対する都市の需要が生産を促進させて増産になるが、同時に焼畑の輪作体系を破壊してしまうのである。現金収入があつて現地は裕福であるが、土地は痩せる一方で、ある日突然全体の耕作が不可能になりかねないし、昔森林だった土地が荒廃してしまうことが認められる。また、灌漑組織も部分的には古くからあるけれども、非常に限られた

大きい新しい、おそろしく深刻な都市問題が生じているといえる。

しかも輸送力が非常に脆弱なので、ある地域で飢饉の状態があつても、そこへ外からの援助による食糧を持ち込むことが出来ない、というような事態が起きている。

一九八四年の事態もそうだし、現在もエチオピア、ソマリアなどでは同様な事態が起きているようなのである。

このような状態では当然経済は停滞してしまう。アフリカ諸国の農業生産は今のところ成長率がマイナス一％であるといわれている。マイナスの成長で年三％の人口増加を支える可能性はないといつてよい。先に述べたように、伝統的な焼畑農業が肥沃度の減少という深刻な問題に直面している上に、国際市場向けの農産物の国際価格の下落なども災いして、農業生産そのものの危機が到来していて、「アフリカ農業に未来はあるか」という問題提起が国連のFAO（国連食糧農業機関）などでも問題になっている。

食糧生産量がこのように減少しているから、全体として食糧飢饉という状況下で、緊急援助という形の食糧輸

入が行われる。それが毎年のように緊急援助ということになってしまつて、それが当然のようなことになる。黙つていても助けてもらえる、あるいは援助を受けるのが当然である、という甘えの心理が働いて、食糧は余所から貰うものだ、という他者依存根性になってしまいかねない。これも大きい問題であるといえよう。

それでは農業はなにもやっていないのか、政策がないのか、というところではなく、社会主義を標榜していた国などは、輸出向けの換金作物で貿易収支を少しでも良くしようという努力をしてきた。しかし国際価格を決める力はヨーロッパなどにあつて、その狙いはかならずしも常に成功しているとはいえない。悪化する経済環境のなかで、輸出農産物の価格は下落するばかり、ということになってしまふ。このことは農産物に限らず、ザイールやザンビアなどにとって生命線である銅の国際価格の低迷が、これらの国の発展計画に大きい修正をうながしていることは周知の事実である。それが対外債務を膨れあがらせて、日本を含む先進諸国の債権の延払い、あるいは棒引きなどが問題になつていのである。

今日のアフリカ諸国の特徴を示している。現在もエチオピアのメンギスツ政権が崩壊させられ、ブルキナファソも政権が交替し、マリも一九六八年以来のトラオレ政権がクーデターによつて倒されている。このような状況が各地に見られるのである。ケニアやザイールなども、決して安定しているとは言いがたい。このような政情の不安定な情勢は外国資本の投資を妨げ、またクーデターの度に政治難民が発生して各地で問題を起こしていることになる。いくつかの地点で政治難民のキャンプが作られているし、また国連平和維持機構(PKO)の常駐を認める地域がザイールをはじめ、アンゴラ、ナミビアなどに見られるのである。

四、従属理論を超えて

このような危機の政治経済的な状況の原因を、サミール・アミンらアフリカの経済学者たちは従属理論で説明しようとしている。すなわちいわゆる第三世界の経済は世界資本主義に組み込まれ、先進資本主義諸国に従属したために、自律的な発展が出来ないという理論である。

農業政策、あるいは経済計画そのものが失敗で、その根拠にしていた社会主義的理論の間違いが失敗の根本原因であり、最大の理由である、という批判もある。例えばタンザニアなどはアフリカ社会主義をスローガンにして、貧しくてもみんなでお互いに助けあってやればやれるはずだ、ということであつたが、理想はよいとしても現実にはどうしても官僚制が頭をもたげ、役人が威張つてしまつて、さまざまな困難の原因になつてしまつた。おなじことは東欧諸国などにもあてはまるが、人々の自助努力を阻害してしまつたのである。官僚組織のようなものが、社会主義の理想を破壊してしまつたのだと言えよう。援助をする側は同情からやるとしても、それが当然ということになつてしまうと、スポイルしてしまうことが有りうるということになる。

そのような状況にあるところに、紛争がさまざまに起きてくる。クーデターが政権交替の通常の手段のようになることもある。現在のアフリカの国は島嶼をふくめて五十四であるが、そのうち二十四カ国は軍事政権で、一党独裁の国が二十八におよんでいる。これは少なくとも

それには中心と周辺という理念が内包されている。また、ウォーラスティンは互酬制原理に立つ小社会(ミニ・システム)と、世界システム(集中的権力と多元的分業の世界帝国、あるいは分散的政治権力と一元的分業の世界経済)との二層構造でこの状況を捉えようとしている。これらの理論と現状の構造的認識の間にはさらに議論を深めてよりよい認識を得なければならないと思う。川端教授の構造とは別の文脈であるが、私は『アフリカ学への招待』(一九八六年、日本放送出版協会)のなかで、五つの項目をあげて危機について述べておいた。

一つは今の危機の引き金になつたのは自然の問題、天候不順である、ということである。これは日本も例外ではなく、地球全体が狂いはじめている、という状況なのかもしれない。それが前提になつていふことを知らねばならない。その意味では地球上の人類全体の一蓮托生の問題とながつている。オゾン層の破壊、酸性雨、二酸化炭素の増大による温室化現象など、地球全体の問題とかがわつていふのである。

第二に、私が挙げておきたいのは、モノカルチュアの

問題である。原料となる単一作物を広大な地域で栽培している。ケニアであれば紅茶のプランテーション、タンザニアであれば繊維作物であるサイザルのプランテーションが、ほとんど一日行程の規模で栽培されている。それを食糧作物に転換することは現在のところ当事国政府にはないようである。これは現在のアフリカ大陸における国境と同様に、植民地時代に作られた遺産をそのまま継承していることの問題でもある、といえよう。

第三には、生態系の破壊。これは川端教授も指摘されているところでもあるが、砂漠化や森林の減少などが問題になり、また焼畑という伝統的な耕作方式や、伝統的な放牧方式の牧畜などが、それぞれ今日になって大きい問題を生みはじめていのである。自然生態系の保護や野生動物の保護なども、現実には多くの密猟問題などが存在していて、やはり大問題になりつつある。

第四には、国家経済政策の失敗がある。年率三%の人口増加、年間マイナス一%の食糧生産の現状は、将来を暗くしている。すこし数字を紹介しておく、ブリタニカ国際年鑑の一九九一年版によると、国連アフリカ経済

貧困ラインを下回る生活状態におかれている人々の数は約一億六千万人に達している、ともいわれる。これが今日、目前にしている九〇年代のアフリカの現実なのである。

これらの数字の根底には、アフリカ人の社会と文化の危機が存在していることを知るべきであろう。アフリカ人の生活を脅かす危機として、ここでは四つのことを挙げておきたい。一つは、伝統的生活様式あるいは生業形態の崩壊である。地域社会や家族・親族の組織が麻痺してしまつて、昔からの約束、礼儀作法、生活規範などが消滅してゆきつつある。ハッザの例のように、学校教育の強制が伝統的知識技能の世代間継承の機会を奪つていくということもある。「脱部族化」は近代化の指標として歓迎されたこともあったが、それは貴重な伝統のかなりものを同時に捨て去ってしまったのである。地域共同体の機能麻痺が地方の荒廃、疲弊を招き、それが環境の悪化を誘発している面も少なくない。第二には、都市社会の問題がある。雇用機会のない都市に人口が集中して、集住による多少の雇用を生みだしてはいるけれども、

委員会は、九〇年代のアフリカの景気は八〇年代よりもさらに厳しくなるという予想を述べている。八〇年代の隔年に、一人当たりの所得で一・七%、固定資本形成で一・九%、輸出額で二・七%、輸入額で三%、商品価格は三・一%いずれもマイナス成長をしている。失業は七〇年代の四倍の速度で増加、対外累積債務は八〇年から八九年の間に二倍に増加して、総額二五六億ドルに達している——すなわち借金をしてしまつていて、ということである。九〇年代のアフリカは、八〇年代のこうした大きなマイナスの遺産を引き継いでいるのだといえる。世界銀行の数字によれば、一九九〇年におけるアフリカの平均所得は三十年前と同じである。住民の六〇%が貧困にあえいでいる。幼児死亡率は依然高く、エイズが急速に広がっている。それにもかかわらず、人口は世界のどの地域よりも急速に増加していて、一九九〇年で五億九八〇〇万人、二〇〇八年になると一〇億人になるだろうと推定されている。八〇年代、アフリカ諸国の国内総生産は、年率二・九%の伸びを示したが、これでは人口増に追いつくことはできなかった。アフリカ全体で

都市施設の未整備の環境はおそろしい病気の温床にもなるし、また犯罪の巣窟ともなりうる。そのような環境で、人々は再部族化による自衛手段を講じていることが観察されている。

第三には、教育の問題がある。ハッザのような例もあるが、文化の継承は「近代化」の過程で歪曲されてしまったのではないだろうか。そして政治難民という、祖国に住めない人々、デラシネの知識人などを生みだしてしまつたのである。

そして最後には、あらためて環境問題に戻らなければならない。貧困な生活環境、人口急増、過放牧、熱帯林の減少、砂漠化、野生動物の減少や自然生態系の破壊といった問題が、この大陸の全部に覆いかぶさりつつある。

かつてナイロビの町は美しい自然に装われた、良い町であった。今その町を夜、安全に歩きまわることが出来ない。多くのこの町を良く知っている人が、強盗に遭ったり、道でホールドアップに遭ったりしている。アフリカに甘い幻想を抱いて、旅行などしていると、ひどい目に遭うだろう。

この「どん底」から脱出した時に、アフリカは本当の底力を発揮して、すばらしい大陸になるだろう。幸い南アフリカ政府の政策転換などに、その曙光が見えかけているといえるかもしれない。しかし、アフリカが本当に幸福の大陸になるには、まだまだ日がかかりそうである。そして「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」（宮沢賢治）のだから、私たちもまた彼らのために力を貸してゆかねばならないだろう。

（よねやまとしなお・京都大学教授）